



## ヴィクトリア朝学会はいかにあるべきか

荻野昌利

日本ヴィクトリア朝文化研究学会会長・南山大学名誉教授

私が前会長の松村昌家氏から会長職を引き継いでからすでに3年半がたつ。ご依頼をいただいたときには、ほんのつなぎのつもりでいたので、さして深く考えもせずにお引き受けしてしまったが、就任してすぐに思い知らされたことは、この仕事は単なる名誉職でもなく、また思いつきで済ませるものではないということ、事務局と運営委員会、編集委員会など各種委員会との綿密な連携をとり結びつつ、着実に将来を見据えて実行されなければならない仕事であるということであった。そのことに気が付くのは、いささか遅きに失したが、今さら悔やんでも始まらない。どこまでやれるかはわからないが、やるからには、中途半端は許されない。350人近い会員を有する学会を運営するためには、それを可能にする組織が確立されていなければならない。

その組織を立ち上げるためには、私をバックアップしてくれる強力な援軍が必要だった。そして幸いなことに、原公章日本大教授の呼びかけで、その援軍が私の周辺に就任当初より私の呼びかけを待たずに結集してくれたのは幸いなことだった。彼を中心にして運営委員会が装いを新たに立ちあげられ、学会の運営に当たってくれた。中でもとりわけ功績があったのは、事務局長を引き受けてくれた佐藤明子日本大准教授である。彼女がこれまであまり機能していなかった事務局の組織にテコ入れをしてくれて、運営にかかわる実務のほとんどすべてにわたって手を入れて円滑な運営を可能にしてくれた。原運営委員長と佐藤事務局長の甚大な努力の結果、運営委員会は極めて有効に機能するようになり、それが編集委員会の機能の隅々にまで影響を及ぼし、『ヴィクトリア朝文化研究』や「ニューズレター」などが機関誌の名にふさわしい成果を上げるようになった。

しかし組織の改善はそれに留まるものではなかった。学会の最大の課題は、学会の最終決定機関であるはずの理事会がそれにふさわしい機能をいかに発揮するかにかかっていた。正直言って、これまで学会の運営はほとんどが会長の一

存に委ねられていて、理事会はほとんどミナルな存在でしかなかった。この人事を動かすためには、大幅な人事異動を行い、会長の最終助言機関としての存在感を発揮するように体制を整える必要がある。そのために私は会長二期目に入った時、失礼を顧みずに理事会人事の大幅な入れ替えをさせていただいた。

私がなぜこのような人事にこだわったかと言うと、この学会が従来の学会の枠組みを越えた広がりを持った学会で、従来のような暗黙の了解のもとに全てが成り立つような訳にはいかないからである。当然ながら色々なジャンルの学問の人々が統合され、さまざまなフィールドの研究が並行して行われることが求められる。単なる場当たりの対応に寄らず、中、長期的なビジョンを持って学会の方針を確立してかからねばならない。さまざまな学問領域の人材を幅広く糾合して、多角的な計画を運用するためには、それに即応した人事的活用術が必要になる。そのためにはどうしても学会の組織ががっちりと確立されていなければならない。それには理事会の充実がなにも増して求められる。あらゆる領域に目を光らせ、従来の枠組みに拘泥することなく、新しい人材の発掘のために積極的に活動してやる必要がある。また理想的には、そのような遠くまで見渡せる学際的視野を持った人物の登用が、これからの理事にはますます求められることになる。

文化の定義は極めて多彩なものであり、個人の知識がそのすべてを包括することは、これも現実的に言って、極めて困難なことであろう。しかし自分の専門領域外のことであっても、それを理解しようとする視座を有することは、だれにでも可能なことであり、またそのような学問的寛容な精神がわれわれのような学際的研究機関になによりも求められるものである。ヴィクトリア朝文化研究はそのような会員を求め、そうした会員のニーズに応える組織体であってほしい。そのためにはどうしてもさらなる学会そのものの基盤強が必要なのである。

## Greetings from an Overseas Scholar



Malcolm Andrews  
Emeritus Professor,  
University of Kent

It is an honour to be invited as a guest into your columns, especially since I have enjoyed your hospitality in so many other ways during visits to Japan. It is my good fortune to have a number of friends among Japanese Victorianists, particularly Dickensians, and I am well aware of shared enthusiasms and sometimes daunted by the eagle eye for detail in their scholarship. Detail in fiction can too easily be overlooked, especially in the rush to follow a compelling narrative. No age massed its details as densely as the Victorian age did. They over-furnished their rooms (could there be any greater cultural antithesis in this respect between Japanese and Victorian English rooms!) and often over-furnished their novels, but it becomes utterly fascinating to roam among the clutter of the period. As a retired person now, that is exactly the pleasure I find in re-reading texts I taught over my career. Dickens once made a distinction between two kinds of walking: 'one, straight on end to a definite goal at a round pace; one, objectless, loitering, and purely vagabond.' If one applies that distinction to reading habits, then the 'straight on end' kind too often typifies the pressures in a teaching career. The 'vagabond' reading mode is a treat when it can be managed: the experience of browsing in those rich fictional worlds! The Victorians themselves browsed: they took over a year and a half to complete their reading of a new serialised novel by Dickens. The reader could have two birthdays before finishing the story. Once *Middlemarch* or *Bleak House* became canonised into the calendar of university-course set books, how little opportunity has that given young first-comers to Victorian novels to absorb them and their worlds at that slow rate enjoyed by the first readers? Teaching syllabuses vary, of course. The French University system, for example, is likely to give much more time to a single text than its counterparts in England or the United States.

Thus within the university world as well as in the wider world, readers come to experience Victorian literature in vastly different 'consumer' contexts, and yet that brings them closer together. And that is really the theme of my short contribution here.

I have been interested for many years in the range and responsiveness of different constituencies of readers of

Victorian fiction – across the world – as a consequence of my job as Editor of *The Dickensian*, the journal of the international Dickens Fellowship (founded in 1902). In addition to publishing learned articles, *The Dickensian* functions as a magazine recording the full range of current interests in Dickens – new biographies or critical studies, stage adaptations of the stories, Dickensian topography, the occasional new Dickens letter, and so on – as well as a newsletter of the activities of the Fellowship in all its branches around the world. That Fellowship is a very mixed community, crossing all boundaries of age, social background and nationality. In that respect it is a kind of mirror of the Victorian readership Dickens served so faithfully and courted so assiduously. It still amazes me how Dickens's appeal continues to transcend cultural differences – in the matter of comic effects, for instance, where one might well have expected those differences to be particularly marked given how very varied each culture's sense of humour can be. It is not just national differences that I am thinking of: English tastes in humour in the 21st century may be just as remote from Victorian tastes as those of today's Japanese readers of Dickens; and yet his comic spell seems to hold both of us.

The analogy with Shakespeare is often made. Shakespeare survives his compulsory participation in school and university syllabuses, trapped as a forbidding 'set book' for young people, and continues to flourish in the broader culture, just as Dickens does. How does this come about? I can think of three possible answers. Both writers create an extraordinary social range in their characterisations. Both writers have a great gift of language, sometimes to playful excess. Both writers write for a popular culture: pantomime and farcical modes blend or alternate with the tragic and pathetic. Where, for example, Jane Austen and Henry James work within a more homogenised mode, the coexistence of these very mixed modes in Shakespeare and Dickens, and their jubilant jostling within a single play or novel, generate so much of their energy and engages the widest range of responses.

The Dickens Fellowship, representing readers of all kinds and all tastes, is constitutionally pledged to 'knit together in a common bond of friendship, lovers of that great master of humour and pathos, Charles Dickens.' Now, in furtherance of such formal and informal 'common bonds', I am delighted by the opportunity to contribute to the Newsletter: I feel I hardly have to stretch any distance in order to be able to shake hands with my fellow Victorianists in Japan.

## England, whose England?

新潟大学准教授 金山 亮 太

1995年の秋から10ヶ月間在外研究員としてロンドン大学に滞在した際に、学生用掲示板で ULOG (University of London Opera Group) の団員募集のポスターを見たのが、サヴォイ・オペラとの本格的な出会いだった。『ペイシャンス』の公演を1ヵ月後に控えた11月11日の午前11時、不意にスタジオから音が消えた。Remembrance Sunday だったのである。本番用の仮縫い衣装に身を包んだ全員がその場に立ち尽くし、口を閉ざした。当時間が起こったのか分からなかった私は、すぐ横にいた学生に理由を尋ねたが、彼もまた無言で首を振るばかり。しばしの静寂の後、何事もなかったかのように練習は再開された。学生たちは、あの短い時間中、二つの世界大戦の戦死者への祈りを確かに共有していたと思う。そして、ヴィクトリア朝の香りを伝えるこのオペレッタに参加するアングロ・サクソン系の人々にとっての国家・民族意識に対する興味が私の中に生まれた。

『タイムズ』と記事の独占契約を結んでいたカーナヴァン卿がツタンカーメン王の墓を発見したこと(1922)をすっぱ抜いたことで一躍有名になったジャーナリスト H. V. Morton は、『デイリー・エクスプレス』に連載した自動車旅行記事を元にした *In Search of England* (1927) 他の著作によって、イギリス各地の魅力を再発見し紹介した。しかし、この「～を探して」という表題の裏に潜むのは、西洋文明の行き詰まりを象徴する第一次世界大戦以降、ヨーロッパ全体を広く覆った一種の喪失感である。イギリス人もまた、民族的アイデンティティの動揺を経験した。

W. E. Henley の愛国的な詩の一部である ‘England, my England’ (1900) という表現は、D. H. Lawrence の ‘England, my England’ (1915, 1922) や A. G. Macdonell の風刺小説 *England, their England* (1933)、そして George Orwell のエッセイ “England, your England” (1940) に至るまで、様々な形でパロディ化されてきた。これ以降もロンドンの移民社会を扱った作品で知られる Colin MacInnes の時事評論集 *England, half English* (1961) や、テーマパーク化する現代英国に対する風刺の効いた Julian Barnes の *England, England* (1998) があり、最近ではテレビで人気の庭師 Alan Titchmarsh までが *England, our England* (2007) なる本を出している。この「英国よ、わが英国よ」という、もはや誰も素面では口に出せないような、いかに時代がかった文句は、栄光と恥辱にまみれたヴィクトリア朝の記憶と現代英国人を結ぶ一種の呪文となっているようだ。

イングリッシュネスの定義が揺らぐことで最も影響を受けるのは、むしろアメリカのアングロ・サクソン系の人々であることを考えると、国際ギルバート&サリヴァン祭が、2010年からはアメリカのゲティスバーグでも毎年6月下旬(ゲティスバーグの戦いの直前)に開催されるようになったことも腑に落ちる。これから彼らのイングリッシュネスがどこへ向かうのか、興味は尽きない。

## 宝塚歌劇とオスカー・ワイルド

和歌山大学准教授 桐山 恵子

「ダンディーそれは男の中の男、クールで大胆、ダンディーそれは夕日の輝き、滅びの美学」と英国紳士に扮した男役が歌い踊るのは、宝塚歌劇団 2006 年星組公演『ネオ・ダンディズム — 男の美学 —』の一場面である。そこでジョージ・ブランメル、シャーロック・ホームズらとともにダンディーの代表としてあげられるのがオスカー・ワイルドだ。人生の芸術化を目指した唯美主義者ワイルドと、浮世離れした夢の世界を創造する宝塚。ワイルドに関する宝塚歌劇の舞台を紹介してみたい。

至高の美を誇るドリアンに、いくらイケメン俳優を起用しても、各々が思い描く理想の美青年には、所詮、役不足だ。この難役に挑んだのが 1996 年星組『ドリアン・グレイの肖像』主演の日本人離れした容姿をもつ紫吹淳だ。白いブラウスに身を包んだ純粹無垢なドリアンも魅力的だが、恋人を愛おしむより、冷たく拒絶する悪に染まったドリアンは衝撃的に甘美だった。

オフ・ブロードウェイで 1960 年に発表された『真面目が肝心』のミュージカル版『アーネスト・イン・ラブ』。宝塚はこれを 2005 年月組、瀬名じゅん、花組、樹里咲穂主演で連続上演した。水晶宮のような建物に電飾がとまり、その中には前奏曲を奏でるオーケストラというお洒落な幕開き。泣き声のオノマトペとして「はひふへほ」を効果的に使用し、「慈善と偽善の区別がつかない」など日本語ならではの台詞も生き洗練された脚本だった。突き抜けて明るいミュージカルで、何度見ても飽きなかった。

ワイルドの名にはいっさい触れていないが、それが依拠するところは明らか。1996 年雪組『アリスの招待状 — チェンヤ猫ホテルへようこそ —』がある。アリスの世界をイメージして作られたホテルの客人が繰りひろげるラブ・コメディでは、アーネスト / ジャック役を高嶺ふぶきが巧みに演じわけた。原作では弟が発見されて幕となるが、本作では弟のみならず従兄弟が四人も現れるというおまけつき。

童話「幸福の王子」からモチーフを得た場面がある 2004 年雪組『タカラヅカ・ドリーム・キングダム』。サファイアの瞳を失い盲目となった貴城けい演じる幸せの王子は、つばめに導かれて、どうにか舞台を横切るという凝った演出。横尾忠則による幻想的かつ退廃的な舞台美術も美しかった。別場面ではあるが、轟悠演じる薔薇収集家が ROSSO という若者に惹かれるダンスシーンは、ROSSO を踊る朝海ひかるの柔軟な肢体が妖しくゆれて、ワイルドとアルフレッド・ダグラスを彷彿させた。収集家は口づけと引きかえに ROSSO の毒牙にかかり命を失う。

究極の美を求め男性を愛したワイルドと完璧な男性像を女性が実現する宝塚。ワイルドの求めた美がこの世で可視化できる場があるのなら、それは人工的に装飾過多な男性美を絶えず生み出してきた宝塚かもしれない。現実の男性よりも一層イケメンな男性が、女性によって具現される宝塚歌劇は、逆説をなにより愛したワイルドの美の世界にふさわしいのである。

桜美林大学専任講師 出島有紀子

1858年医師法が定めた登録制度のもとに出現した女性医師たちの物語は一国史観では語れない。最初の女性医師は帰国前に米国で資格を得て開業していたし、続く十数名は欧州大陸で医学教育を受けている。イギリス帝国に限って見ても、先んじて女子学生を受け入れたのはエディンバラ大学とマドラス医学学校であり、登録に必要な試験を女性に開放した1876年法を当初から適用した指定医療機関はダブリンの医学学校だけであった。そして以後増加してゆく女性医師の一定の割合は海外に活動の場を見出す。女性医師という職業の発展と定着はインド抜きには語れない。ヴィクトリア朝時代の女性医師の歴史の舞台は帝国の周辺だったとも言えよう。

しかし別の視点から見ると、女性医師をめぐる物語の中心はイングランドにあった。1880年代後半になっても二桁にすぎなかった女性医師の所在ではなく、「英国人女性医師がインドに必要」と声高に唱える社会現象に注目した場合である。1880年代、「女性医師をインドへ」というスローガンは、女子の医学教育の妥当性をめぐる議論とは切り離された形で熱狂的に支持された。「白人女性の責務」や「宗教上の理由で男性医師の診療が受けられないインド人女性の苦難」の言説が浸透したためであるが、一つの転機を作ったのはヴィクトリア女王だった。インドから帰国した女性医師が藩王夫人からの書簡を渡した際、女王は「インド人女性の苦しみを和らげるあらゆる試みに賛同する」と述べたが、この発言は国内の女性医師らの執筆・講演活動によって世に知られるようになった。別の女性医師は女王が「インド女帝として、高度な技術を身につけ教育を受けた女性医師を苦しみの下にある臣民らのもとへ送り出すだろう」と期待している。これに応えるかのように、女王は1884年にインド総督夫人に命じて女性医師の支援団体を創立させた。この団体はその成果が問われる以前に、試みそのものが本国で絶賛された。

女性医師の歴史のもう一つの舞台は表象の場である。*Punch*に描かれる女性医師像や小説中の女性医師は数十年の間に変化していく。ヴィクトリア朝時代の小説中の女性医師を分析した近年の研究によると、女性医師は反対派によっても賛成派によっても「新しい女」として描かれているというが、その新奇なイメージに実社会の女性医師ら自身が修正を試みている。多くの小説でモデルにされている女性医師 Sophia Jex-Blake は *Nineteenth Century* 誌上で過去20年間の小説に描かれた女性医師像を検証しているし、自ら小説を執筆した女性医師たちは「型破り」ではない普通の女性としての女性医師や医師の道を捨てて母親になる女性を描いている。個々の女性医師を追いかけて国境を超えた社会史を描く試みも魅力的だが、史料の中に見出した人々と小説や絵画に描かれた人物たちを突き合わせて新たなイメージを立ち上げさせるのも面白そうだ。

豊橋技術科学大学准教授 田村真奈美

ヴィクトリア朝の社会は福音主義の影響を強く受けていたと言われる。この時代のドメスティック・イデオロギーにも福音主義信仰が深く関わっており、Leonaore Davidoff & Catherine Hall, *Family Fortunes* (1987) はこの点を詳細に検証した研究である。「家庭的」であることが女性の‘nature’であり、女性の果たすべき役割は家庭にある、という考え方は福音主義信仰の枠を超えて広がった。一方、福音主義復興運動自体において(とくにミドル・クラスの)女性が果たした役割も大きかったが、国教会では宗教活動が制限されていたため、多くは慈善活動や人道的な活動に発露を見出した。これらの活動は、女性たちが「女らしさ」の規範から逸脱することなく、家庭という個人的な領域を超えて社会的な活動に参加することを可能にした。

このように、18世紀後半から19世紀前半にかけての社会のイデオロギー形成に福音主義がいかに関わったかという研究は、主に歴史学者によって盛んに行われてきたが、これらの研究はこの時代の文学研究にとっても非常に興味深い。これまで文学と宗教というと、主に教義の面からの研究が多く、正直に言ってクリスチャンでない人間には近づきにくい領域であった。しかし、ヴィクトリア朝の小説には、とくに信仰の問題を取り上げたものでなくとも、しばしば人々の生活の一部として信仰が(ときには風刺的に)描かれている。宗教の社会的・文化的側面に焦点を当てた研究の手法と成果は、文学研究にもっと取り入れられてもいいのではないかと。

この時代には宗教作家と呼ばれる作家たちの一群がおり、教訓的な物語や作法書、貧困層に向けた小冊子を盛んに出版していた。宗教作家には女性が非常に多かったが、執筆もまた、女性にとっては手がけやすい宗教活動だった。文才を社会のために役立てたいという使命感は、宗教作家に限らず、一般の作家たちにも共有されていた。職業作家になることが「女らしくない」とみなされがちであった時代に、神に与えられた才能を社会に役立てているという意識は女性の執筆活動の支えになっていた。1840年代を中心とした社会問題小説の流行も、その書き手の多くが女性であったことを考えれば、この作家の使命感と関わっていたと思われる。

このようにヴィクトリア朝前期の女性作家の使命感と福音主義の影響の問題を考えているうちに突き当たったのが、『アンクル・トムの小屋』の著者ハリエット・ビーチャー・ストウである。リンカーン大統領をして「あなたが南北戦争を引き起こしたのですね」と言わしめたというまことしやかな逸話が残っているストウは、実際に世論に大きな影響を与えた作家として、おそらくイギリスの同時代の女性作家たちにとっては憧れの存在だったのであろう。福音主義復興運動は大西洋の両岸で影響力をふるったのであるから、女性作家と使命感の問題にもトランス・アトランティックな視座が必要なのかもしれない。

## 幕末・維新时期における英式兵制

同志社大学嘱託講師 竹本知行

幕末期、幕府や開明的な諸藩は、自らの軍制改革に西欧の近代兵学を積極的に採り入れた。それは、アヘン戦争における清国の敗北という報が衝撃をもってわが国に伝わったことで、海防という国家的課題が、いわか、クローズアップされてきたことを直接の契機としている。当初、西洋兵学の知識はわが国の西欧における唯一の交易国だったオランダの兵書から摂取されていた。そして、開国後はイギリス・フランス・プロイセンなどの兵書も新たにもたらされることとなった。

我が国における洋式兵制と言えば、当初は「オランダ式」が採用され、明治初年では「フランス式」、この後に「プロイセン式」に転換されたというような説明が一般的になされている。そして、このような説明は一応正しいといえる。しかし、ここで立ち止まって考えてみたい。そもそも、一国の兵制というものは不変の形たりえず、兵器の進歩や社会情勢の変化に伴って、絶えず更新されていくはずのものである。そのため、わが国の兵式選択においても、どこの国のシステムに倣ったかという問題に加えて、どの時代のものをモデルとしたかという点も考慮する必要がある。

さて、本稿のテーマである幕末・維新时期における英式兵制についてであるが、まずは国立公文書館所蔵の「府県史料」から、全国 104 藩の「兵式」の概略を見てみたい。当時、全国には約 300 もの藩が存在していたため、捕捉率は 3 分の 1 程度ではあるが、全体的な傾向をつかむことはできよう。それによると、慶応4年初め、和式は 24 藩、蘭式は 26 藩、英式は 11 藩、仏式は 3 藩、併用 1 藩、不明 39 藩だった。これが、明治3年初めには、和式 2 藩、蘭式 13 藩、英式 52 藩、仏式 16 藩、併用 4 藩、不明 18 藩となっている。この流れは徴兵制の導入を顧慮した明治政府(兵部省)によって陸軍の仏式統一が布告されるまで続いている。

これを見ると、当初洋式兵制の主流であった蘭式はわずか 2 年のうちに半減し、替わって、英式が、陸軍の仏式統一以前は圧倒的に優位を占めたことが分かる。つまり、全体的に見れば、日本の採用した洋式兵制は、蘭式から英式を経て仏式が採用されたということになる。それでは、この流れはどのような事情から形作られていったのであろうか。

幕末期、わが国の兵式選択の主要な論点は、部隊の編成や訓練をどこの国の教本に倣って行うかという点にあった。それは洋式火砲の導入とそれに対応する兵力の編成・運用を行うという現実的課題を、封建的身分秩序を維持しつつ実現しなければならないという社会的制約があったためである。徴兵制や統帥機構の問題などが論点になるのはもっと後のことである。

我が国の洋式兵制の嚆矢は文政年間(1820 年代)に長崎の

町年寄高島秋帆がオランダ人から学んで創始した高島流砲術である。これには前装滑腔銃いわゆるゲヴェールに対応した銃隊の編成・運用法である「西洋銃陣」を含んでいた。蘭式はその後、安政2(1855)年と安政4年からの2次にわたるオランダ海軍派遣隊による伝習を通じて幕府・諸藩に広まった。

しかし、新式の前装ライフル銃(有効射程:ゲヴェール比で約 6 倍)が本格的に日本に輸入される 1860 年代になると、蘭式の採用比率は急速に低下し、替わって英式が広く採用されるようになるのである。これは何も前装ライフル銃がイギリスの専売特許品だったことを意味しない。この技術自体は 16 世紀には知られており、その構造的欠陥を改良することで軍の制式銃にしたのはフランスが最初であり(1849 年配備開始)、イギリス軍の配備はその 4 年後である。また、オランダ軍も同時期に同型の銃を採用し、それに合わせて歩兵操典も改定している。

蘭式の日本でのプレゼンスの急速な低下の最大の理由はオランダの政策転換にある。オランダは、ベルギーの分離の後、人口と領土の大幅な減少や経済的危機と政治的不安定によって国力が著しく低下していた。また、1848 年の革命後は、自由主義政府によって陸軍兵力の大幅な削減が実行された。1861 年の平時正規軍の常備兵力 21,790 名は 1830 年の約 8 割減である。これとともに、財政上の観点から海上戦略も大幅に見直され、オランダは、1865 年以降、強大な海軍力の保持を放棄し、本国と植民地の沿岸防衛戦略を採用することとなった。これによって、オランダ海軍の日本への派遣は途絶えることとなったのである。

銃器の更新に伴う編成の転換は教本を翻訳したのみではそれだけでは困難であり、幕府や諸藩はオランダ派遣隊に代わる実地伝習を必要とした。その新たな「教師」となったのがイギリスであった。佐賀藩は元治元(1864)年に前装ライフル銃を採用しており、同年 7 月に長崎に停泊していたイギリス軍艦に藩士を派遣し伝習を受け、同藩の兵制を英式に転換した。このような動きは幕府も同様で、元治元年 10 月、横浜のイギリス駐屯軍からの伝習を決定し、翌年から小銃の更新も始めている。幕府陸軍奉行は当初、オランダへの留学生派遣を幕閣に申請したが、老中が外国奉行らの評議に従って駐屯イギリス軍からの伝習を命じたといわれている。部隊の訓練には体で覚えるべき人間の動作が重要であるため、多くの人間が伝習可能な相手として駐屯イギリス軍が選ばれたのである。

産業革命を経たヴィクトリア期のイギリスがアジアに積極的に進出していたまさにその時期、オランダの海上帝国は黄昏を迎えていた。この対照的な両国の姿を我が国の幕末の「兵式」においても見る事ができよう。幕末期に日本にもたらされた前装ライフル銃の多くが同型の銃の中で最も完成された機種といわれたイギリス製エンピール銃だったことは象徴的である。そしてまた、オランダが海上帝国路線放棄を決めた第 2 次トルベッケ(Johan Thorbecke)内閣の海軍大臣が、日本への第 2 次オランダ海軍派遣隊の隊長であったカッテンディーケ(Willem van Kattendijke)だったことは歴史の皮肉といわねばなるまい。

## 第9回大会 シンポジウム ヴィクトリア朝イギリスと開化日本 ― 交流の諸相・レジュメ

アームストロング砲と幕末・維新

大手前大学名誉教授 松村昌家

1862年5月1日、第2回ロンドン万国博覧会開会式場に、西欧諸国からの賓客に混じって7名のサムライの姿があった。幕末遣欧使節団の三使と、選ばれた4人の代表者たちである。使節団は総勢38名。5月2日から彼らは連日のように万博会場を訪れて、広大な万博会場の光景にふれたのだが、彼らを最も深く印象づけたのは兵器の展示で、なかでもアームストロング砲は際立っていた。

クリミア戦争を契機に、W. G. アームストロングによって発明され、第2次アヘン戦争(アロー戦争)やニュージーランドのマオリ戦争で威力を発揮したアームストロング砲は、今やイギリス産業界の覇者になろうとしていたのである。

使節団がロンドンを訪れたのは、ウリッジの王立兵器工場が、アームストロング砲の製造で最も活気を呈していた頃であった。この兵器工場を見学した使節団の熱心さは、案内役兼通訳をつとめたジョン・マクドナルドの手記に詳しいばかりでなく、福沢諭吉や益頭駿次郎らの著作にも如実に写し出されているとおぼしい。幕臣たちにとっては羨望的であり、垂涎的であったに違いないのである。

帰朝早々に竹内、松平、京極ら三使は、この後込施条式大砲輸入の肝要性を幕府に提言、多量のアームストロング砲の発注に及んだが、それが成功した痕跡はない。ジャーディン、マゼソン商会やトマス・グラヴァーらイギリスの商人たちが、本国政府の政策に従って、倒幕勢力をサポートしていた実情からみて、幕府がイギリスから銃砲を輸入する可能性は、ほとんどなかったと言ってよいだろう。

倒幕勢力という点では薩長だが、アームストロング砲の入手、開発に関して先陣を切ったのは佐賀藩だ。長崎の防備に当たっていた佐賀藩は、第2次アヘン戦争に出動したアームストロング砲の威力の情報をいち早くキャッチし、その輸入を図るとともに、自力でそれを製作するのに情熱を傾けた。そして1864年に40ポンド砲の製作に成功、その後さらに研究を進めて、唯一アームストロング砲の保有藩となった。

1868年1月27日の鳥羽伏見の戦いまで、超然と中立の立場をとっていた佐賀藩が、薩長と幕府のどちらにつくか。それによって戊辰戦争の勝敗の行方が決まる情勢になっていたのである。同じ年の3月13日、藩主鍋島綱重は、遂に腰をあげて、西軍につくべく京へ向かった。そのときに持ち越した武器の中には、6ポンドアームストロング砲2門ほか多数の小型新兵器が含まれていた。そして7月4日の江戸上野での彰義隊との戦いと、10月4日の会津若松城の戦いにおいて、佐賀藩のアームストロング砲は、幕末の歴史を決する働きをした。ただしそれはモラル・ジレンマを感じさせない、冷酷な戦いであった。

ヴィクトリア朝英国における Japanisme と medievalism ― 明治日本のラファエル前派受容と“Japan for Japanese”運動との関連から

筑波大学大学院准教授 山口恵里子

ヴィクトリア朝前半に高まりをみせた中世主義と後半に流行した日本趣味は連なりをもつ現象である。その結節点となったのは、1862年のロンドン万国博覧会であり、ゴシック・リバイバルの建築家を中心とした中世主義者であった。たとえば、博覧会の中世部門の責任者であった建築家の W. パーヅは「日本部門は博覧会の真の中世部門である」という評を記し、デザイン理論を展開した C. ドレッサーもヨーロッパ中世と日本の実用品を重ねた。彼らが同様に関心を示したのは、日本のデザイン、とりわけ人物や動物を象ったグロテスクで力強いデザインや彫り物だった。彼らはそれらに力やエネルギー、感情の発露を見てとったのだった。

博覧会の中世部門に家具を出品した D. G. ロセッティも弟のウィリアム・マイケルとともに、博覧会後に浮世絵を蒐集しはじめた。彼らが所有した浮世絵のリストを調査した結果、彼らが蒐集の早い時期に武者絵を多く購入していたことが判明した。武者絵への興味は、ウィリアム・マイケルが日本美術評で記したグロテスクやデザインのエネルギーや力への称賛と呼応するものであり、先のパーヅらの関心とも一致する。

博覧会後の1860年代後半、中世主義は陰りをみせ、日本趣味は唯美主義と共鳴して広がってゆく。70年代には日本製品への購買欲が増大するがしかし、その背景には中世主義の影響も依然として強く残されていた。人びとは、ヨーロッパ中世が息づくときみなされた日本の品を購入しようとしたのである。日本の芸術家もその動向をふまえた製品を作るようになり、劣悪な製品も英国側にもたらされた。だが、日本趣味が最高潮に達した90年代、O. ワイルドが『ドリアン・グレイの肖像』で「中世主義の病弊を忘れ、ギリシア的な理想に立ち戻る」必要を訴えたように、力やエネルギーを発現した日本の品は、ギリシア的理想と結ばれるようになっていたのである。

その中世主義は、同時期の日本の文学、芸術においてラファエル前派の芸術を通して熱狂的に支持されるようになってゆく。上田敏や戸川秋骨らは、ラファエル前派作品を、ダンテをはじめとするイタリア中世の文学・芸術への関心とともに吸収し、藤島武二や青木繁らは、ロセッティや E. パーソン＝ジョウンズが描いた中世を日本の古代に重ね、彼らの装飾的な様式を自身の絵画に取り入れた。他方で、ラファエル前派の中世主義的作品は、英国の様式から離れ、日本本来の「伝統」に回帰することを求める声と結ばれるようになってゆく。T. J. トビンが論じたように、英国の「オーセンティックな」生活や中世的遺産を称えていると考えられたラファエル前派の作品やウィリアム・モリスが創設した古建築物保護協会が西洋化反対論者のシンボルとなったのである。

横浜は、アデンから続く英国東洋航路の延長として開港した。19世紀前半、インドから東アジアへと領土が拡張することもない、それら要衝の港を結んでいたのは、「非公式海軍」とも呼ばれた P&O である。従って、1862年に東洋航路をさかのぼって英国へと渡った通詞の森山栄之助は、Alcock 公使が意図した通り、「地球をとりまく植民地の連鎖」に圧倒されていしば上京することになった。1837年、初代インド総督の Bentinck は、汽船による交通が盛んになることで東洋が英国の文明に敬服し、繁栄と安定が促進されると述べたが、こうした楽観を Alcock は引き継いだのである。そして、これはベストセラーとなった旅行記 *Greater Britain* (1869) の著者 Dilke などのように、1860年代までよくみられる傾向だった。

そんな謳歌の合唱に水をさしたのが、南北戦争期に建造したアラバマ号をめぐる緊張関係にあったアメリカによる大陸横断鉄道開通(1869年)である。これは、大西洋航路と大陸横断鉄道を組み合わせることで、従来とは逆の西周りによって、英国と横浜が結ばれることを意味した。そうすると、東アジアの物資運搬を圧倒的に独占してきた英国東洋航路にとって由々しき事態となりかねない。ただ大陸横断鉄道開通の半年後にスエズ運河が完成し、東洋航路にかかる日数は大幅に短縮されたため、当初予想されたような脅威は回避された。

一方、英国の東洋航路と米国の太平洋航路が横浜で出会うことで、1870年代以降、世界一周旅行が盛んとなる。そんな記録の一つ、Lucy の *East by West* (1885) には、井上馨から聞いた英国への密航体験が記されている。敵情視察と意気込んだ井上は、東洋航路を遡るうちに、森山同様に大英帝国の国力の差に感服したというのである。Lucy はまた、アメリカでの排中移民法通過に触れて、自由貿易主義の限界を記している。実際、Bentinck が予想だにできなかった中国系移民問題と日本の成長は、1890年代以降の世界一周旅行記に独特の陰影を帯びさせることになったのである。

そんなふうに東洋航路が Alcock の意図とはおよそ逆の効果をもたらした一例として、『米欧回覧実記』(1878)がある。東回りで世界を一周した岩倉使節団は、ロンドンで文明の粋を目にしたあとで東洋の植民地を訪れたため、「東南洋ニ生産ヲ求メルモノハ、大抵文明国ヨリ棄テラレタル民ナリ」と、闇雲な崇拝を戒めたのだった。使節団はまた、Alcock とともに訪日したジョン・フランクリン夫人と面会し、その Japan Room で茶をふるまわれてもいる。そして、このように渡英した日本人を内面から描き、外国人居留地の消滅と人種闘争を予言したのが、西回りで日本に居着いた Hearn であった。東回りと西回りという双方向の世界一周によって、文字通り双方向の視点が容易となり、東洋と西洋は縦横無尽に交流し衝突することになったのである。

## 1. 日英交流のはじめ

日本と英国の交流は長く深い。すでに日英交流は相当詳細に研究・報告されてきたが、医学に関しては教育の違い、伝染病の認識の違いなどで必ずしもよく研究されていない。

最初の来日英国人はアダムズ(1564-1620、三浦按針)であるが、彼の医学伝承の内容は不分明。江戸時代を通じて平戸、長崎を介して西洋医学が伝わったが、直接の交渉は薩摩藩雇入れのウイリス(烏利士、宇理宇私、1837-1894)の医学教育に始まる。その生徒には世界で最初に脚気(beriberi)の原因と治療法を発見した高木兼寛(1849-1920)がいる(森鷗外の反対を受けながら)。薩摩で学習し、後に英国で修学しているから、英国医学の薫陶を受けた最初の人士と言ってもよい。

## 2. 結核のロマン化

ギリシャ語で労咳(phthisis)と呼ばれた結核が、その英語訳としての肺病(consumption)と呼ばれたとき、この病には独特の意味付けがなされた。それは、蒼白く痩せて目が大きく光る病気としての病気、才能が逆り新しい創造力に満たされた病気であった(佳人薄命、肺病天才説)。詩人キーツ(1795-1821)が、肺病でイタリアのローマに転地療養した時に、シェリー(1792-1822)はピサにいた。パイロン卿(1788-1824)は、いずれ自分には肺病で蒼白く死に女性たちに騒がれたいと願っていた。

英国の風刺画家ローランソン(1756-1826)や、フランスの風刺画家ドーミエ(1808-79)は、当時肺病がどのように見られていたかを示した。19世紀中葉以降ラファエル前派の人たちの描いた肺病患者は、弱り痩せ細り、やがて蒼ざめて死んでいった。

明治維新以降、欧米の影響(ロマン主義)が大きかったが、すでに江戸時代に日本国内で独特のイメージが醸成されていた事(川柳を見よ!「労咳は大振袖の病也)を考慮すると、むしろ結核の浪漫化が速やかに行われたと言うべきであろう。

## 3. 梅毒を巡る言説

梅毒は日本では軽視され、杉田玄白が随筆『形影夜話』の中で嘆いたように、患者の7~8割が梅毒で、幕末来日ものポンペヤヘポンは、日本人は梅毒には無頓着とした。

幕末維新期の横浜、横須賀の英仏駐屯部隊では、梅毒感染が懸念され、娼妓の梅毒検査が喫緊の課題となった。フランスが1867年に、翌年英国が、駐屯部隊付近の娼館の梅毒検査を提唱し、実際に横浜で設立された梅毒病院(Lock Hospital)は、兵庫と長崎と広がり、政府の娼妓解放令などと相まって、梅毒検査・梅毒追放へと発展したのである。

英国で1864、67、69年に施行された伝染病予防法(Infectious Diseases Acts)に連動して、植民地インド、東洋の国日本にも検梅が波及したのである。英国で女性蔑視とされたこの法律が、フェミニズム運動を胎したが、日本では娼妓運動に留まった。平塚雷鳥らの青鞞運動が出て来るのは少し後である。さらにその後には女性参政権運動が生まれて来る。

## 特別講演

### ヴィクトリア朝建築の詩学 — 桂冠詩人が守った街並み

名古屋大学准教授 大石 和 欣

ロンドンのセント・パンクラス駅構内に立つブロンズ像。駅の保存に尽力した桂冠詩人ジョン・ベッチャマン(1906-84)のものである。

「国民のテディベア」と呼ばれた彼の最大の魅力は、ヴィクトリア朝建築物への情熱的関心と保存運動にある。1950年代から1960年代において解体の危機に直面したヴィクトリア朝建築物を再評価し、詩や散文に記録し、さらにマス・メディアを通して保存を訴えていった。

ベッチャマンの出発点はモダニズムからの離反にある。モダニズム建築を礼賛する『建築評論』の記者になるものの、彼の本当の関心はヴィクトリア朝時代の建築物や古い教会建築にあった。『好古趣味的偏見』(1939年)では、デザインとしてではなく、生活文化の一部として建築物を批評して独自の路線を打ち出す。それゆえに、セント・パンクラス駅の鉄骨、キングズ・クロス駅の実用的構造を讃える。

優美さと実用の調和を重んじるベッチャマンの建築の詩学においてさらに重要な要素は、古い建築物が円熟味を増し、複層的な歴史の層を包摂した「混濁」である。地方の村落に点在する名もない小さな教会建築にはそんな「混濁」し、「人間的」な建築美が宿る。何度も修復を経て、現在でも宗徒たちが寄り集う生きた教会にこそ、思想と美と実用性を包含した詩学があるのだ。

それは複数の異なる時代の建物が建ち並ぶ街のモザイク的景観にも当てはまる。1943年に単行本になった『イングリッシュな都市と小さな町』が指摘するように、イングランド各都市の目抜き通りや郊外では、そんな時代の層がモザイク模様の街並みとして表出し、「ピクチャレスクな」景観美を構築している。

ベッチャマンにとってゴシック建築とは、そうした時代の層を包摂し、庶民の信仰と生活が自然に築いたものであった。したがって、中世のゴシック教会を絶対視するラスキンとは立場が異なる。むしろ、ラスキンが批判したジョージ・ギルバート・スコットやウィリアム・バタフィールド、ジョージ・エドマンド・ストリートのように時代に即し、生活的実用性に富んだネオ・ゴシック建築物や家屋、さらに都市郊外に築かれていった庶民的な「ネオ・ネオゴシック」住宅の街並みを高く評価していく。

そんな郊外の一つがベッドフォード・パークである。アン女王様式と呼ばれる瀟洒な風情の家屋が並んだこの後期ヴィクトリア朝郊外は、1960年代に取壊しの危機に合う。ベッチャマンは住民たちの繰り広げる反対運動に参加し、街並み保存に貢献した。

建築は社会の歴史を内に刻み、人びとの生活とコミュニティを育む母体である。エイサ・ブリッグズとともにヴィクトリア朝協会の設立にも関わり、19世紀の鉄道や駅の文化的意義をも再確認したことも考えれば、ベッチャマンの活動と詩学は、20世紀のヴィクトリア朝文化再考のプロセスを示唆している。

## 研究発表・レジュメ

### 19世紀中葉イギリスのホメオパシーにみる医療の権威

明治大学大学院 黒崎 周一

19世紀中葉のイギリスでは、医師の専門職化が進む一方で、既存の正統医療とは異なる、独自の理論を掲げた非正統医療が台頭していた。従来の研究は、非正統医療と正統医療との対立を強調し、前者を社会の周縁に位置づけてきたが、特にホメオパシーと呼ばれる一派は、支持者による組織化の進展もあって、正統医療との対立が一層強調されてきた。

これに対し本報告では、ホメオパシー医の普及活動を、慈善と結びつけて考察した。篤志病院などの慈善医療への関与が、正統派の医師のキャリア形成に重要であったことは、すでに指摘されているが、慈善が医療に及ぼした影響は、それだけにとどまらなかった。正統派の医師が慈善医療からホメオパシーを排除しようとする中で、ホメオパシー医は独自に篤志病院などを設立していたが、市当局や地域住民がこれらを援助する場合、正規の免許医による慈善事業であれば、ホメオパシーと正統医療を区別することはなかったのである。つまり両者の学問上の論争に地域住民はさしたる関心を払ってはおらず、こうした地域住民の支援を必要としていたという点で、正統医療と非正統医療との間に大きな差異はなかった。慈善は、非正統医療と正統医療の双方を含む医療の権威形成に大きく寄与していたのである。

### 視覚化への欲望 — 観光と文学

静岡産業大学准教授 岡谷 慶子

ルネサンス期のイタリアに発端を見る「文学巡礼」は元来詩人の先達への墓参であった。イギリスではバイロンが『新エロイズ』の原風景を追って、レマン湖を訪れた体験が『チャイルド・ハロルドの巡礼』として作品化され、後世の読者によって追体験された。「文学巡礼」が世俗化し大衆化し、「リタラリー・ツーリズム」へと変容したのはまずスコットランドであった。『湖上の乙女』の出版がきっかけで、人々のカレドニアへの関心が高められた。スコッチ・ディアスポラたちにとって、バーンズが低地出身者の、スコットが高地出身者の崇拜対象であり、各々の「Country」への巡礼ツアーが流行した。

以後、大衆読者層が誕生し、マス・ツーリズムの時代が出現した。一般読者が作家の原風景や生家、作品舞台を視覚化する目的で旅行するようになった。伝記文学がこの現象に拍車をかけた。ヴァージニア・ウルフの初めて公開された記事はギャスケルの伝記に触発されたブロンテのハワース訪問記であった。世紀転換期には英米で文学と観光を結びつけたガイドブックの刊行ラッシュがあった。ウルフは *TLS* で『文学巡礼』シリーズの書評を手がけ、その図説に対して、想像の飛翔を阻み、不必要であるとして批判的姿勢をとるが後年、自らスコットの墓参をする。それは彼女の「文学巡礼」だったのである。



## オリエン特への揺れるまなざし — イザベラ・バードのアジア紀行をめぐって

プール学院大学准教授 大田 垣 裕 子

『日本奥地紀行』を著したイザベラ・バード (1831-1904) はヴィクトリア時代のレディ・トラベラーの中でも、旅した範囲の広さ、また旅行体験に基づいた膨大な著作や活発な講演活動において傑出していた。本発表では前半でバードの生涯を伝記的に辿り、後半で彼女が 1878 年から 1879 年にかけて訪れた日本やマレー半島の紀行文を主として取り上げた。そしてアジアの事象に関する細やかで鋭い観察記述の中に彼女の矛盾する視点の混在、すなわちアルカディアとしての東洋への幻想とアジアの国々の宗教や文化に対する否定的解釈が読み取れることを明らかにした。

ある時は淡々と、ある時はユーモアたっぷりに語られる紀行文には多くの数字、統計、名詞の列挙が見られる。それは未知のものごとを同定し、把握し、コントロールする手段であった。しかし同時に彼女は、自己の基準でのみ判断を下す性急さを避けようとし、自戒の言葉を綴っている。そのバランスのとれたものの捉え方が作品の魅力につながっているように思われる。自文化中心主義に偏らず文化相対主義をめざす姿勢はポストコロニアル時代に生きる私たちに自らの異文化理解を常に客観的に吟味し直すことを迫っているのではなかろうか。

## 外面の美学としての衣装 — 『ウィンダミア卿夫人の扇』におけるアーリン夫人の衣装考察

名古屋大学大学院 森 綾 香

オスカー・ワイルド(1854-1900)の戯曲『ウィンダミア卿夫人の扇』(1892)に登場するアーリン夫人は、唯美的な衣装を使って成功する人物である。彼女は、豪華な衣装で観客を惹きつける「外面の美学」の持ち主であり、またオーガスタス卿を虜にした点で「宿命の女性像」を彷彿させる人物でもある。しかし、彼女の仮面の裏には、過去に娘を捨てて駆け落ちした母としての悲しい姿がある。この像は、当時演劇で人気のあった「不名誉な母像」を踏襲したものである。それまでの芸術作品で多く描かれてきた流れに従えば、彼女に関わる誰か又は彼女自身が滅びるはずが、彼女が意図的に服を選び、その衣装を着て演じ続けることで物語は幸せに幕を閉じる。これが、ワイルドの提示する女性像、衣装の力を巧みに使うアーリン夫人である。彼女は、語りたいことを衣装に語らせ、衣装を替えることで語られることを変える。つまり、仮面としての衣装が彼女の人生を先取りすれば、彼女の未来が後から付いてくる生き方である。ワイルドはアーリン夫人において、当時の墮落した女のモチーフを用いながらも、彼女に衣装の力を自在に使いこなさせ、彼女をまらうけているはずの悲しい結末を免れさせたのである。

## ウィリアム・モリスの中世主義受容

神戸大学大学院 清 川 祥 恵

中世主義(medievalism)とは、ヴィクトリア時代に最高潮に達した、中世の社会・文化・倫理観を理想化し、復興しようとする潮流である。ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)は、とりわけジョン・ラスキンから大きな影響を受け、芸術の再興・復権をめざして中世を理想化した人物として知られている。しかしながら彼の中世に対する態度は、キリスト教信仰(ひいてはカトリシズム)を中心理念として掲げた従来の中世主義とは異なっていた。そこで本発表では、モリスの初期・後期の文学作品の描写を用いて、彼が中世主義の伝統をどのように自身の思想に汲みいれたかについて考察した。

今日までの、モリスの思想に対する評価は、「先人達が主張したような社会改善の理論を人々の感情・思想と結びつけた形で具現化しようとした」という論調に終始しがちである。しかしモリスの、民衆と‘cathedral’が乖離しているならばそれは‘fellowship’ではない、という主張からは、ほとんど異教的な理想へと接近しながらも、人々のまったく世俗的な連帯ではなく、「真実の」霊的つながりを企図した、彼の独自性が窺える。従って、この点をより詳細に検討することは、モリス以後の中世主義の展開を明らかにする上でも、意義深いと考える。

## ジョン・ラスキンの女子教育 — マーガレット・ベルのウィニントン・ホールを中心に

日本女子大学講師 升 井 裕 子

ジョン・ラスキン(1819-1900)は『胡麻と百合』(1865) 第二講「王妃の庭園について」において、女性が家庭の平穏を守ることを期待した。しかし、男性の義務が公的で、女性の義務が私的であるという当時の通念を否定し、国家に対しても家庭に対するのと同様の役割を女性に求めた。ラスキンは、当時の産業化が生み出した社会悪を一掃し、国家の美德を回復する為には、女性の役割が不可欠だと考えたのである。女性が社会の一員としての義務に適応する為の教育の必要性を感じたラスキンは、女子教育への関心を高めていく。その関心の高まりのなか、ラスキンが熱心に関わった女子教育機関が、マーガレット・ベルのウィニントン・ホール(1851年設立)であった。ラスキンは、ウィニントンに対し、金銭的な援助に加え、描画、鉱物学、聖書の授業や、絵画や鉱石の貸出し等、精力的な支援を行った。様々な支援を通じ、ウィニントンがラスキン自身の女子教育論を実践する場になったことに疑いはない。しかし、ウィニントンは、実践の場としてだけでなく『塵の倫理』(1866)へと繋がる多くのアイデアをラスキンに与えた場でもあったことを確認した。今後、ウィニントンとラスキンの相互関係をより詳細に考察することで、これまで積極的に評価されてこなかったラスキンの女子教育論の見直しに貢献できると考える。

## 特別寄稿:海外学会紹介

### Research Society for Victorian Periodicals

西南学院大学准教授 三宅敦子

RSVP ― といっても、これから私が書こうとしているのは、パーティの招待状ではない。*Victorian Periodicals Review* という学会誌を発行している Research Society for Victorian Periodicals という学会についてである。この学会は以前から気になっていた学会だったので、2008年9月から1年間、幸いにも在外研究の機会を得た折に出かけてみる気になった。

学会のHP (<http://www.rs4vp.org/index.html>)によれば、創立は1968年。その年、ニューヨークで開催された MLA の学会で、Michael Wolff をはじめとする、数名の学際研究志向の研究者によって設立され、彼が初代会長となった。創立に携わったメンバーはそのほとんどが、*Wellesley Index of Victorian Periodicals* 出版のための研究に携わっていたという紹介が物語るように、参加者はどちらかといえば、出版物としての雑誌そのものや、雑誌のインデックス化・データベース化に関心を持っている人が多いようだ。その証拠に2009年8月の学会には、“Fishing the Golden Stream: Adventures in Online Research on the Victorian Press”というデータベースについてのディスカッションがあった。司会者は Victorian Research Web でおなじみの Patrick Leary。ヴィクトリア朝の雑誌文献のデータベース化は昨今非常に進んでいて、英米の公立・大学図書館では実に多種多様なデータベースにアクセスすることが出来る。このディスカッションパネルの話によれば、この学会の中心メンバーは、Gale 社が手がける数多くのデータベース化プロジェクトに携わっているようで、それを知ると無機質なデータベースの裏側に、人の顔が見えてきて面白い。

とはいえ、雑誌記事の内容に関心をもっている会員がいないわけではない。年に1度開催される年次大会では、雑誌出版に携わっていた作家や女性編集者についてのパネルも、ちゃんとある。ただそういった発表でも、日本の英文学者が期待する程度に、文学との関係性において語られるとは限らない。学会にどんな好みの参加者が来るかは年次大会のテーマによる、というのが、私の過去の参加経験に基づく判断だ。この学会では年次大会ごとに必ずテーマが決まっている。発表の募集要項では、19世紀の雑誌に関するのなら何でもよいと一応謳ってはいるが、プログラムを見ると、そのテーマに即した発表が優先的に選ばれることになっているようだ。

外国人参加者としては、学会の雰囲気も気になるころだろう。私は第41回年次大会(2009)、第42回年次大会(2010)に参加し、幸運にも共に発表の機会に恵まれた。海外で開催される作家別の学会に比べるとそれほどでもないだろうが、聴衆は比較的フレンドリーだというのが、正直な感想だ。それも面倒なデータベース化の作業をしてでも、他者と知を分け合いたいと願う人たちが作った学会だからなのだろう。

## 第10回大会報告

第10回全国大会は、2010年11月20日(土)、名古屋大学の情報文化学部(名古屋市千種区不老町)で開催されました。その概要は以下の通りです。

午前10時に、運営委員長の総合司会により、C30室で開会式が行われ、荻野昌利会長による挨拶があった。次いで、名古屋大学の開催校委員、松岡光治教授より、会場の案内などがあった。

午前の部の研究発表は、10時10分より11時50分まで、第1室C33、第2室C34に分かれ、以下の6件の研究発表が行われた。その概要は以下のとおり(所属と敬称は略)。

### 研究発表

#### 第1室

司会: 武井暁子

1) 黒崎周一「19世紀中葉イギリスのホメオパシーにみる医療の権威」

司会: 中田元子

2) 岡谷慶子「視覚化への欲望 ― 観光と文学」

3) 大田垣裕子「オリентへの揺れるまなざし ― イザベラ・バードのアジア紀行をめぐって」

#### 第2室

司会: 角田信恵

1) 森彩香「外面の美学としての衣装 ― 『ウインダミア夫人の扇』におけるアーリン夫人の衣装の考察」

司会: 川端康雄

2) 清川祥恵「ウィリアム・モリスの中世主義受容」

3) 升井裕子「ジョン・ラスキンの女子教育 ― マーガレット・ベルのウィニントン・ホールを中心に」

次いで、12時から13時まで、C36室で、玉井暁氏司会による理事会が開かれた。報告事項としては、活動報告(佐藤事務局長)、学会誌報告(舟川編集委員長)、ニューズレター報告(編集委員に代わり運営委員長)があり、審議事項としては、2009年度決算案と2010年度予算案(小野会計担当)が承認された。続いて、昨年度提案のあった、副会長、ニューズレター委員、HP委員の設置を明記した会則改定案が承認された。その結果、副会長選出については荻野会長が、井野瀬久美江氏を副会長候補として推挙し、出席理事全員の賛成で選任された。さらに運営委員長より、次回の全国大会の提案があった。それにより、次回大会は2011年11月19日(土)に、神戸市の甲南大学で開かれることになった。開催校委員は同大学の井野瀬久美恵氏である。最後に著作権のポリシーについて(編集委員長)と、学会ホームページのサーバー変更(松岡HP委員に代わり運営委員長)が了承された。

13時10分から、会場をC30室に移して、辻みどり氏司会による総会が開かれた。従来、総会はプログラムの最後に置かれていたが、運営委員会によって、本年度から午後の部の最初に開くように変更されたためである。総会の議事は、上記

の理事会に準じ、ここでも決算案、予算案、会則改定、副会長選任、次回大会案などが承認され、13時40分に終了した。

引き続き同室で、13時50分から14時50分まで、特別研究発表が以下のように行われた(所属と敬称は略)。

#### 特別研究発表

司会：新井潤美

大石和欣「ヴィクトリア朝建築の詩学——  
桂冠詩人が守った街並み」



これに続いて、15時10分から17時40分までシンポジウムが、下記のように行われた。ただし、途中休憩を10分間はさんだ。

#### シンポジウム

「ヴィクトリア朝イギリスと開国日本——文化交流のはじまり」

司会・パネリスト：松村昌家「アームストロング砲と幕末・維新」

パネリスト：山口恵理子「ヴィクトリア朝における Japanism と medievalism —— 明治日本のラファエル前派受容と“Japan for Japanese”運動との関連から」

パネリスト：橋本順光「大英帝国の航路から見た横浜居留地——人種衝突と美術交流のあいだで」

パネリスト：福田真人「帝国の病：ヴィクトリア朝英国」



最後に、井野瀬久美恵氏による閉会の辞をもって、大会は17時50分に、無事終了した。

午後6時から、名古屋大学南部厚生会館2階の南部食堂「彩」で、岩田託子氏司会により、懇親会がなごやかに行われた。会場では、荻野会長挨拶、松村顧問による乾杯、歓談のあと、蛭川久康氏をはじめとする、4人の会員からスピーチがあった。大会出席者は約130名(芳名帳への記帳者は110名、それにアルバイト学生、その他、未記帳者などを加えた数字)、懇親会出席者はアルバイト学生5名を含む65名であった。

本大会は、開催校委員、松岡光治氏の多大なご尽力と、氏の指導のもとにある学生アルバイト諸君の献身的な働きにより、つつがなく運営されたことをご報告する。本大会にご助力いただいた全ての方々に、心から感謝したい。(文責・原 公章)

## 第11回大会のお知らせと研究発表の募集

第11回大会は、2011年11月19日(土)午前10時から甲南大学岡本キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「ヴィクトリア時代の生活と幸福感」(仮)で司会兼パネリストの神戸大学教授の重富公生氏・横浜国立大学教授の有江大介氏を中心に小野塚知二氏(東京大学教授)、小田川大展氏(岡山大学教授)の各氏がパネリストを務められます。また今年には会長である南山大学名誉教授の荻野昌利氏に特別講演をお願いすることになっております。どうぞふるってご参加ください。

研究発表を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送でお送り下さるかあるいはメールの場合は、添付ファイルで学会のメールアドレス(victoria@chs.nihon-u.ac.jp)までお送りください。メールの場合、受け取りの返信が届かないときはお手数ですが再度送信してください。締め切りは2011年7月16日(土)必着でお願いいたします。なお、学会の性質上、研究発表は「文化研究」に比重をおいたものとします。

## 会員の出版物紹介 (2009.12～2010.11)

### 【単著】

久我真樹『英国メイドの世界』(講談社)

清宮倫子『ダーウィンに挑んだ文学者——サミュエル・パトラーの生涯と作品』(南雲堂)

村岡健次『イギリスの近代・日本の近代——異文化交流とキリスト教』(ミネルヴァ書房)

### 【共著】

井野瀬久美恵(編著)、高田実・谷田博幸・金山亮太・小関隆『イギリス文化史』(昭和堂)

今村紅子『映画で楽しむイギリスの歴史』(金星堂)

入子文子(共編著)『独立の時代——アメリカ古典文学は語る』(世界思想社)

入子文子『メディアと文学が表象するアメリカ』(英宝社)

岩井学『ロレンス研究——「旅と異郷」』(朝日出版社)

内田能嗣・原公章(共編)会田瑞枝・富田成子・阿部美恵・岸本京子・前田淑江・谷田恵司・早瀬和栄・奥村真紀・小野ゆき子・山本紀美子・福永信哲・清水伊津代・大嶋浩『あらすじで読むジョージ・エリオットの小説』(大阪教育図書)

宇田和子(編著)小野ゆき子・田中淑子・佐藤郁子『ブロンテと芸術——実生活の視点から』(大阪教育図書)

岡谷慶子(共著)『現代イギリス文学と場所の移動』(金星堂)

門野 泉(編著)『英国演劇の真髄——ユーモア・ウィット・エキセントリシティ』(英光社)

木村晶子(編)、金丸千雪『メアリー・シェリー研究——「フランケンシュタイン」作家の全体像』(鳳書房)

内田能嗣(編著)、岸本吉孝、菟原美和、松原則子、早瀬和栄、前田淑江、田村妙子、渡千鶴子、服部慶子、小田夕香理、田村真奈美、奥村真紀、小野ゆき子、皆本智美、大田美和、

清水伊津代、阿部美恵『ブロンテ姉妹の世界』(ミネルヴァ書房)

十九世紀英文学研究会(編)、福岡忠雄、坂田薫子、風間未起子、北脇徳子、渡千鶴子、杉村醇子、清水伊津代、高橋和子、木梨由利、高橋路子、西山史子『「カスターブリッジの町長」についての11章』(英宝社)

新野緑・西村美保・関良子・馬淵恵理・服部慶子『英米文学の可能性 — 玉井暉教授退職記念論文集』(英宝社)

日本ジョンソン協会(編)、鈴木美津子・久野陽一・千森幹子・惣谷美智子『十八世紀イギリス文学研究(第4号 — 交渉する文化と言語)』(開拓社)

日本ギヤスケル協会(編)、鈴江璋子、松岡光治、廣野由美子、猪熊恵子、田中孝信、木村正子、直野裕子、武井暁子、榎正行、波多野葉子、矢次 綾、玉井史絵、多比羅眞理子、金丸千雪、木村晶子、宮丸裕二、市川千恵子、松原典子、閑田朋子、関口章子、鈴木美津子、松村豊子『誕生 200年記念 エリザベス・ギヤスケルとイギリス小説の伝統』(大阪教育図書)

橋本順光『世紀転換期における国民・ジェンダー規範の形成 — トランス・ナショナルな視点から』(基盤研究(C)科研報告書)

平賀三郎(編著)、中尾真理『ホームズなんでも事典』(青弓社)

平林美都子(共編著)『映画を通して知るイギリス王室史 — 歴史・文化・表象』(彩流社)

富士川義之・川崎明子『梅檀の光 — 富士川義之先生、久保内端郎先生退職記念論文集』(金星堂)

松岡光治(編著)、村岡健次、松村昌家、新井潤美、玉井史絵、大田美和、荻野昌利、宮丸裕二、石塚裕子、宇田和子、三宅敦子、中田元子、武井暁子、田中孝信、鈴木美津子、市川千恵子、田村真奈美、波多野葉子、木村晶子、矢次綾、梶山秀雄、金山亮太、新野緑、長瀬久子、猪熊恵子、小宮彩加『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』(溪水社)

松村昌家『一九二〇年代の東アジアの文化交流』(思文閣出版)

#### 【単訳】

梅宮創造『ディケンズ・公開朗読台本』(英光社)

鮎澤乗光『キャストブリッジの町長』(トマス・ハーディ著、大阪教育図書)

河内恵子『オスカー・ワイルドとキャンドルライト殺人事件』(ジャイルズ・ブランドレス著、国書刊行会)

佐々木徹『ズリイカ・ドブソン』(マックス・ピアボーム著、「20世紀イギリス小説個性派セクション」3、新人物往来社)

中和彩子／横山茂雄・佐々木徹(編)『フォーチュン氏の楽園』(シルヴィア・タウンゼント・ウォーナー著、「20世紀イギリス小説個性派セクション」2、新人物往来社)

横山茂雄(編・訳)佐々木徹(編)『ヴィクトリア朝の寝椅子』(マーガニータ・ラスキ著、「20世紀イギリス小説個性派セ

クション」1、新人物往来社)

横山千晶『ラスキン — 眼差しの哲学者』(ジョージ・P・ランドウ著、日本経済評論社)

#### 【共訳】

川本静子・原公章(編・訳)『ジョージ・エリオット — 評論と書評』(彩流社)

杉村藍(監訳)『子どもが描く世界 — オースティンからウルフまで』(C・アレグザンダー、J・マクマスター編著、彩流社)

原公章『多文化アメリカ文学 — 黒人・先住・ラティノ／ナ・アジア系アメリカのフィクションを比較する』(ロバート・リー著、富山房インターナショナル)

松岡光治『涯(はて)』(「百年文庫」シリーズ第22巻、ポプラ社)

真屋和子『身体の歴史II — 19世紀 フランス革命から第一次世界大戦まで』(A・コルバン編／小倉孝誠監訳、藤原書店)

横山三鶴、岩井学『D. H. ロレンス書簡集 I 1901～1910/6』(松柏社)

---

#### 編集後記

このニューズレターの編集がそろそろ終わりに近づいてきた頃に、東日本大震災が起きました。未曾有の大災害といわれる今回の震災、被災されました先生方には心よりお見舞いを申しあげます。去年ニューズレターにご寄稿くださった Judith Flanders 先生から、暖かいお見舞いのメールをいただきました。

今回もいろいろな先生方のご協力を得て、ニューズレターが完成いたしました。ご寄稿くださいました先生方には心より御礼申しあげます。巻頭エッセイとして、今期で任期を終えられる荻野先生が、今後の学会のあり方について論じておられます。また、海外からは日本の研究者と交流の深い Malcolm Y. Andrews 先生にご寄稿くださいました。

ニューズレターとは本来、会員同士が自由に情報を交換する場です。皆様からの積極的なご投稿をお待ちしております。

---

The Victorian Studies Society of Japan Newsletter No. 10, 1 May 2011

発行者 © 日本ヴィクトリア朝文化研究学会

代表者 荻野昌利

編集者 玉井史絵

事務局 日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

事務局長 佐藤明子

Tel/Fax 03-5317-9709/9336

E-mail victoria@chs.nihon-u.ac.jp

Homepage <http://www.vssj.jp/>